

日本語表現科目における曖昧文の指導について

Guidance Concerning Ambiguous Sentences in Japanese Expression Classes

野 呂 健 一

Kenichi Noro

(要 約)

本稿は、日本語の曖昧文について解釈の傾向に偏りがあることを指摘し、日本語表現科目における指導方法について考察するものである。日本語表現科目の授業では、曖昧文を意味が1つに決まるように書き換える指導を行っているが、2通りの解釈に偏りが無い場合の方が、書き換えの必要性がより高いと言えるであろう。さまざまな曖昧文の例を取り上げ、調査結果に基づき解釈の偏りを示すとともに書き換えの指導方法について検討する。

(キーワード)

曖昧文、解釈の偏り、書き換え

1 はじめに

本稿は、日本語の曖昧文について解釈の傾向に偏りがあることを指摘し、日本語表現科目における指導方法について考察するものである。曖昧文とは、1つの文が2通り以上に解釈できる文のことである。以下の例を見てみよう。

A 私は伊藤さんと鈴木さんの家を訪ねた。

B 先生と生徒三人が風邪で休んでいる。

Aは、「私が伊藤さんとともに鈴木さんの家を訪ねた」という解釈と、「私が伊藤さんと鈴木さんの2人の家をそれぞれ訪ねた」という解釈が可能である。Bは、先生1人と生徒3人の併せて4人という解釈と先生と生徒併せて3人という解釈が可能である。

AとBでは、実際の解釈の傾向が大きく異なる。本学学生を対象に2つの解釈のどちらが想起されたかを調査した結果をみると、Aでは、2番目の解釈がやや優勢であるものの、1番目の解釈を想起した者もかなりの数に上った。一方、Bでは、ほとんどが前者の解釈であり、後者の解釈を想起した学生はわずかであった。

日本語表現科目の授業では、曖昧文を意味が1つに決まるように書き換える指導を行っているが、Aの方が、書き換えの必要性がより高いと言えるだろう。本稿では、さまざまな曖昧文の例を取り上げ、解釈の傾向を調査し、解釈の偏りを示すとともに、書き換えの指導方法について検討する。

2 先行研究

ある文が曖昧文になる要因にはさまざまなものがある。野田(2002)は、曖昧文を以下の4種類に分

類している。

- ① 語彙論的なあいまい文
- ② 文法論的なあいまい文
- ③ 意味論的なあいまい文
- ④ 語用論的なあいまい文

野田（2002）によると、①が「文中の個々の単語がもつ意味にあいまいさがあり、そのために文全体の意味があいまいになるもの」（同書：8）であるのに対し、②は単語レベルの問題ではなく、文法論的な原因によるものであり、代表的なものとして、「構造にかかわるあいまい文」「省略にかかわるあいまい文」「指示にかかわるあいまい文」の3種類が挙げられている（同書：8）。また、③は「語句が文の中で使われるときに出てくる文法論的な意味にあいまいさがあるもの」（同書：10）であり、④は「その分が場面や文脈の中で使われるときに出てくる意味にあいまいさがあるもの」（同書：11）であるとされている。

一方、西山（2011）は、文の曖昧性をもたらす要因として以下のようなものを挙げている。

- ⑤ 文を構成している構成要素の曖昧性
- ⑥ 統語構造上の曖昧性
- ⑦ 否定辞や数量詞の作用域の違い
- ⑧ 特殊な構文の曖昧性
- ⑨ 名詞句の意味機能上の曖昧性

西山（2011）は、⑤について「語の曖昧性が文の曖昧性に寄与するケース」（同書：151）であるとしており、これは野田（2002）の①に該当する。⑥については、文の表層レベルでは同一の構造であるものが、深いレベルでは異なった統語構造を有する場合であるとしており、野田（2002）の②のうち、「構造にかかわるあいまい文」に該当する。⑦については、否定辞や数量詞の力が及ぶ作用域の違いによって曖昧性がもたらされるとされ、野田（2002）では「③意味論的なあいまい文」の中の、「スコープにかかわるあいまい文」が該当する。⑧については、英語の because 構文の曖昧性が例として挙げられているのみである。⑨については、「文に登場する名詞句が果たす意味的働き」（同書：166）の違いによる曖昧性であるとされ、野田（2002）においては、「③意味論的なあいまい文」の中の「文法論的意味の違いによるあいまい文」が該当する。

本稿では、野田（2002）における「文法論的なあいまい文」「意味論的なあいまい文」、西山（2011）における「統語構造上の曖昧性」「否定辞や数量詞の作用域の違い」に該当する曖昧文を取り上げる。

野田（2002）はまた、曖昧文の解釈がどのように決まるのかについて、一方の解釈を優先させるために使われる知識として、「前後の文脈」と「発話の状況」の2種類を挙げている（同書：12-13）。それ

に対して、本稿では、前節の例Bで見たように、前後の文脈や発話の状況が与えられていないにも関わらず、解釈に偏りが存在する場合があることに注目するものである。

3 曖昧文に関する意識調査

3.1 調査方法

高田短期大学キャリア育成学科1年前期の必修科目「日本語表現」受講学生に対して、曖昧文の解釈についてのアンケート調査を実施したところ、77名の回答があった。質問項目は、「日本語表現」で教科書として使用している『書き込み式日本語表現ノート』（名古屋大学日本語表現研究会編2008）に曖昧文として挙げられている例について、2通りの解釈のうちどちらの解釈を優先したかが分かるような内容とした。質問に対して複数の選択肢を用意し、無記名で回答させた。

3.2 調査結果

調査結果は表1のとおりである。今回示した曖昧文の中で、最も偏りが大きかったのは、「①先生と生徒三人が風邪で休んでいる」であり、9割以上の学生が一方の解釈を選択した。次に偏りが大きかったのが、②次郎が好きな女の子があそこに立っている」であり、約84%の学生が一方の解釈を選択した。

一方、偏りが最も少なかったのは、「⑥彼と同じくらいその人が好きです」であり、2通りの解釈をそれぞれ全く同数の学生が選択した。このように、前後の文脈や発話の状況が与えられていない曖昧文であっても、解釈に偏りが見られるものとそうでないものがあることが分かる。

次節では、それぞれの曖昧文についての回答結果を詳細に紹介するとともに、曖昧性を生まれないような文への書き換え指導について検討する。

4 曖昧文の指導

本節では、前節で紹介した曖昧文の調査結果を踏まえ、1つの解釈に限定するための書き換え指導について、個々の例に即して検討していく。まずは、解釈の偏りが大きかった曖昧文の例である。

(1) 先生と生徒三人が風邪で休んでいる。

「風邪で休んだのは何人と思うか」という問いに対して、大多数（90.9%）が四人と答えたのに対して、三人と答えたのはわずか5.2%であった。前者の解釈の場合、「三人」と同格関係にあるのは「生徒」だけであるのに対し、後者の解釈の場合、「先生と生徒」全体が同格関係である。ただし、後者の解釈を想起したのはわずかであるため、そのような文意に解釈させるには、「先生と生徒あわせて三人」のようにする必要がある。また、大多数は、先生と生徒の合計が四人であると解釈するわけであるが、その解釈を確実なものにするためには、「先生一人と生徒三人」と言えばよい。

このような例について、野田（2002）は「構造にかかわるあいまい文」の中で、「並列構造によるあいまい文」としている。「先生」と並列されるのが、「生徒三人」なのか「生徒」だけなのかということ

である。この場合、「生徒三人」の結びつきが強いことが、前者の解釈が優勢となる原因と考えられる。

表1 曖昧文解釈に関する調査結果

① 先生と生徒三人が風邪で休んでいる。 風邪で休んだのは何人か？	三人	5.2%	四人	90.9%	その他（決められない等）	7.8%
② 次郎が好きな女の子があそこに立っている。 誰が誰のことを好きなのか？	次郎が女の子のことを好き	85.7%	女の子が次郎のことを好き	5.2%	その他（決められない等）	9.1%
③ しっぽの長い犬と猫がいる。 しっぽが長いのは？	犬だけ	16.9%	犬と猫	66.2%	その他（決められない等）	16.9%
④ 同じ部署の課長と係長が結婚した。 結婚したのは何組？	1組	53.2%	2組	35.1%	その他（決められない等）	10.4%
⑤ 私は伊藤さんと鈴木さんの家を訪ねた。 鈴木さんの家を訪ねたのは？	私だけ	53.2%	私と伊藤さん	39.0%	その他（決められない等）	7.8%
⑥ 彼と同じくらいその人が好きです。 この文の話者（私）が好きなのは何人？	一人	45.5%	二人	45.5%	その他（決められない等）	9.1%
⑦ 君だけが敵ではない。 「君」は敵か味方か？	敵	66.2%	味方	30.0%	その他（決められない等）	7.8%
⑧ 落合君は星野君のようにまわりの評価に左右されない人だ。 まわりの評価に左右されないのは誰？	落合君だけ	32.5%	落合君と星野君	62.3%	その他（決められない等）	3.9%

次の例も、学生への調査の結果、解釈の偏りが大きかった例である。

(2) 次郎が好きな女の子があそこに立っている。

「次郎が好きな女の子」の部分の曖昧である¹。「好き」の対象はガ格で示されるため、被修飾名詞「女の子」を名詞修飾節の中に戻す方法として、「次郎が女の子（のこと）が好きだ」「女の子が次郎（のこと）が好きだ」の2通りが考えられる²。

「誰が誰のことを好きなのか」という問いに対して、「次郎が女の子のことを好き」と答えたのが85.7%であるのに対し、「女の子が次郎のことを好き」と答えたのはわずか5.2%であった。(2)に対して大多数が前者の解釈するため、後者の解釈を優先させるためには、(2)'のように言う必要がある。形容詞「好きだ」は対象としてガ格をとるため、主語を表すガ格との曖昧性が生じるが、対象の名詞に「のこと」が接続することによって曖昧性は消滅する。

(2) ' 次郎のことが好きな女の子があそこに立っている。

次の例を見てみよう。

(3) しっぽの長い犬と猫がいる。

「しっぽが長い」のは犬だけか、犬と猫の両方かという2通りの解釈の可能性があるが、66.2%が犬と猫の両方と答えたのに対し、犬だけと答えたのは16.9%であった。ただし、どちらの解釈か決められないと答えたのも16.9%であった。「しっぽの長い」が「犬」だけを修飾すると「猫」は裸名詞のままというアンバランスが生じるため、「犬と猫」の両方を修飾するという解釈が優勢になると思われる。「犬」だけを修飾するように限定するのであれば、順序を変えて「猫としっぽの長い犬がいる」とすればよいが、前述したアンバランスさは消えない。

(4) 同じ部署の課長と係長が結婚した。

この場合、課長と係長がそれぞれ、他の相手と結婚したという解釈と、課長が係長と結婚したという解釈が考えられる。「結婚する」「けんかする」のように動作主と動作の受け手が対象の関係を有する、いわゆる相互動詞が、並列助詞「と」で結ばれる複数主語を取る場合、当該複数主語が双方向的な動作を行なう主体と解釈されうるのである。前述した2つの解釈のうち、やや優勢だったのは後者の解釈で、53.2%が結婚したのは1組と回答した。それに対して、結婚したのは2組と回答したのは35.1%であった。前者の解釈に限定させるには、「それぞれ」「偶然にも」のような修飾語句を用いればよい。一方、後者の解釈に限定させる方法としては、「課長が係長と結婚した」のように、どちらかを主語にして相手をト格で表すことが考えられる³。

(5) 私は伊藤さんと鈴木さんの家を訪ねた。

この場合、私1人が伊藤さんと鈴木さんの2人の家を訪ねたということ、私と伊藤さんの2人が鈴木さんの家を訪ねたという解釈ができる。前者の場合、「と」は名詞と名詞をつなぐ並列助詞であるのに対し、後者の場合、「～といっしょに」という随伴者を表す格助詞である。前者の解釈をしたのが53.2%に対し後者の解釈が39.0%と、前者がやや優勢ではあるものの、かなり均衡している。このような場合には、聞き手に誤解を招く危険性がかなり高いと言え、一方の解釈しか許さないような文への書き換えを指導する必要があるであろう。(5)'aのようにすれば前者の解釈となり、(5)'bであれば後者の解釈となる。

(5) ' a 私は伊藤さんと鈴木さんの二人の家を訪ねた。

b 私は伊藤さんといっしょに鈴木さんの家を訪ねた。

さらに次の例を見てみよう。

(6) 彼と同じくらいその人が好きです。

「彼と同じくらい」の部分で、「彼のことが好きなと同じくらい」と「彼がその人のことを好きなと同じくらい」という2通りに解釈される。つまり、「彼と同じくらい」なのが、「私が（彼を）好きなこと」であるのか、「（私が）その人を好きなこと」であるのかということである。調査結果では、この2つの解釈の優先度は全く同じであった（どちらも45.5%）。したがって、(5)と同様に、聞き手に誤解を招く危険性が高いため、一方の解釈しかできないような書き換えを指導する必要がある⁴。

(6)' a 彼のことが好きなと同じくらいその人が好きです。

b 彼がその人のことを好きなと同じくらい、私もその人が好きです。

以上の例は、西山（2011）における「統語構造上の曖昧性」に分類されるものである。以下の2つは、否定辞の作用域の違いによるものである。

(7) 君だけが敵ではない。

肯定文「君だけが敵だ」は曖昧ではないが、否定文にすると2つの解釈が生まれる。(7)'は、2つの解釈を、否定辞「ない」の作用域によって示したものである。作用域とは否定の力が及ぶ範囲であり、(7)'aでは、「君だけが」は「ない」の作用域から外れており、「君だけ」という主語に対して、「敵ではない」という述語が対応している。それに対して、(7)'bの場合、「君だけが敵である」という文全体を「ない」が打ち消しているのである。

(7)' a 君だけが [敵では] ない。

b [君だけが敵では] ない。

約3分の1の学生が後者の解釈をしたのに対し、前者の解釈をした学生は約30%であった。曖昧な解釈を生まないように書き換えると以下ようになる。

(7)" a 敵ではないのは君だけだ。／君だけが味方だ。

b 君だけが敵というわけではない。

次の例も同様に、否定「ない」の作用域の違いによるものである。

(8) 落合君は星野君のようにまわりの評価に左右されない人だ。

一つの解釈は(8)'aのように、「まわりの評価に左右され」だけを「ない」が打ち消すものである。この場合、星野君も落合君と同様、「まわりの評価に左右されない」人物である。もう一つの解釈は(8)'bのように「星野君のように」も「ない」の作用域に入れるものである。この場合の星野君は、まわりの評価に左右される人物である。前者の解釈をしたのが62.5%と、後者の解釈をした学生(32.5%)の倍近くに上った。

(8)' a 落合君は星野君のように〔まわりの評価に左右され〕ない人だ。

b 落合君は〔星野君のようにまわりの評価に左右され〕ない人だ。

この場合、曖昧な解釈を生まないように書き換えると以下のようになる。「ように」を否定辞とともに用いると曖昧文になるため、否定文では「ように」を用いないようにと学生には指導している。

(8)'' a 落合君は星野君と同様、まわりの評価に左右されない人だ。

b 落合君は星野君と違って、まわりの評価に左右されない人だ。

以上、学生に対して行なった調査結果をもとに、曖昧性をもたらす要因を探るとともに、解釈を限定するような書き換え指導について検討を行った。書き言葉で表現する場合、韻律等の助けがないため、曖昧性を生み出す可能性、すなわち、相手に誤解される危険性は、話し言葉に比べて格段に高いであろう。自分が書いた文に自分の意図とは異なる解釈が存在する可能性がないかを念頭において推敲するとともに、曖昧性を生み出す表現のパターンについて知っておく必要があるであろう。

5 まとめ

日本語表現科目の教科書に挙げられている曖昧文について、複数の解釈における優先性の調査を実施したところ、解釈の偏りが大きいものからほとんど偏りが見られないものまで段階があることが分かった。調査で取り上げた曖昧文について、曖昧性を生み出す要因及び解釈を1つに限定するための書き換え方を具体的に検討した。曖昧文には、本稿で取り上げたもの以外にもさまざまな種類のものがあるため、今後、それらについても詳細な分析を行うとともに、日本語の曖昧文の包括的な分類を目指していきたい。

註

1 森本(2013)は、「彼は彼女が好きだ」という文が、「彼は彼女を好きだ」「彼を彼女は好きだ」という2つの

解釈を持つ要因について、形容詞「好きだ」に特有の文法的ふるまい、及び「好きだ」の感情主と対象に選ばれる名詞のスケールという2つを挙げている。

- 2 この文には、他に2通りの解釈が考えられる。「次郎が好きな」が「女」だけを修飾すると考えると、「女が次郎のことが好き」という場合と、「次郎が女のことが好き」という場合があり、いずれにしても、その「女」の子が「あそこに立っている」ということで、別に2通りの解釈が生まれる。
- 3 野呂（2012）は、「AとBは友達だ」のような文についての曖昧性を指摘している。すなわち、AとBが互いに友人関係にあるという解釈と、AとBがいずれも話者の友人であるという解釈である。この文と(4)には共通点があり、いずれも現実世界における対称性が言語表現に反映したものだと言える。
- 4 ただし、(6)'bの場合、曖昧性を完全に消すには、「その人」を2回使うという冗長性が残る。

引用文献

- 名古屋大学日本語表現研究会編（2008）『書き込み式日本語表現ノート』，三弥井書店。
- 西山佑司（2011）「曖昧表現からことばの科学を垣間見る」，大津由紀雄編『ことばワークショップ—言語を再発見する—』開拓社，pp.135-180。
- 野田尚史（2002）「日本語のあいまい文」『日本ファジィ学会誌』14巻1号，pp.7-14。
- 野呂健一（2012）「「AとBは友達だ」の解釈について—対称性の観点から」，『日本認知言語学会論文集』11巻，pp.363-373。
- 森本俊之（2013）「「彼は彼女が好きだ」のあいまい性—あいまい性をもたらす文法論的および意味論的素因について—」，『愛知淑徳大学論集—交流文化学部篇—』3号，pp.59-68。